

校内別室の現状について

不登校児童・生徒の状況

対象生徒は、中学 2 年生女子 2 名である。1 名は 1 年時には教室に登校していたが、周囲とのコミュニケーションがとれず、3 学期以降別室登校していた。もう 1 名は 1 年の 2 学期に転入し、家庭内の事情から男性に対しての恐怖心があり、教室に入れない状況になっていた。

具体的な取組

○教科担任が校内別室で指導する時間設定しており、その時間に向けて課題を校内別室で取り組めるよう、1 週間のスケジュールを立てて取り組ませている。また、美術や技術・家庭等については、課題を校内別室で取り組み、教科の教員の指導を校内別室で受けて提出できるようにしている。

○毎週水曜日に対象生徒 2 名一緒にスクールカウンセラー面談を実施している。当初はお互いにコミュニケーションを取ることが難しく、スクールカウンセラーが間に入って会話をしていたが、徐々に打ち解けられ、お互いの関係性が築かれ、2 学期に入り一緒に校内別室に登校するようになった。

○校内別室利用生徒が周囲を気にせず、個別学習に取り組めるよう、パーテーションを設置し、学習環境を整えるようにしている。また、オンラインで教室の授業に参加できるよう、当該学年の授業をオンライン配信している。



○毎月 2 回不登校対策会議を開催し、学校管理職、養護教諭、学年主任、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、生活指導主任で不登校生徒の情報交換と校内別室の運用状況の確認を行っている。特に不登校傾向にある生徒に対しては、校内別室の利用を勧めるよう積極的に働きかけるようにしている。

成果

校内別室を開設したことにより、当該生徒らを含め前年度は不登校傾向にあった生徒 3 名が、毎日校内別室に登校できるようになった。また、自分の体調に合わせて登校できる場所があることが安心感につながっている。

課題

登校するなら、教室へ入りたいという強い希望があり、校内別室を利用することに抵抗感を示す生徒が多いことが課題である。

不登校及び不登校傾向の児童への校内別室における対応について

不登校児童・生徒の状況

対象児童は、数年前から継続して不登校の児童や、令和5年度2学期から教室に行けなくなった児童、教室で過ごすことに不安がある児童、個別のケアが必要な状況があり登校につながらない児童など様々である。

具体的な取組

長期欠席からの登校

- ・当該児童は校内支援会議及び子ども家庭支援センターとのケース会議、学級担任等による家庭訪問、スクールソーシャルワーカーや教員等による朝の迎えにより、数年ぶりに登校した。
- ・校内別室では、教員や支援員が漢字や計算のプリントなどを準備し、取り組ませた。

サポートルームを利用したオンライン授業

- ・学校には登校するが、教室には行けないため、授業のオンライン配信を実施した。



安心できる「居場所」として校内別室を活用

- ・2学期当初に、欠席や登校渋りが目立つようになった児童に対しては、家庭と連携し、不安が大きい時などに校内別室を利用し、心の安定を図った。
- ・教員や支援員が見守る中、プリント学習や読書に取り組んだ。

支援員と担任、SC、管理職との連携

- ・学級担任が、一日の予定を当該児童に伝え、それをファイルなどで支援員、保護者と共有している。
- ・学校管理職は、こまめにサポートルームを訪れ、学習状況や心理状況を確認し、SCも校内別室で、不登校児童と会話をし、相談につなげている。

成果

校内別室指導支援員を配置し、校内別室の開設時間を確保したことにより不登校児童に登校を働きかけやすくなった。また、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーなどが校内別室で不登校児童と関わりをもつことで、支援が充実した。

課題

校内別室を1学期に毎日利用していた2名が、2学期から欠席しており、個々の状況に応じた対応が今後必要である。

校内別室を活用した支援の充実

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、中学校 3 年生である。小学校では特別支援教室に通室していたが、小学校 6 年生の時から欠席が多くなり、中学校 1 年生の 5 月頃から、さらに欠席が増えた。中学校でも特別支援教室での学習を行っていたが、特別支援教室と別室での登校を組み合わせることとした。

具体的な取組

校内での円滑な情報共有

週 1 回実施している生活指導部会と校内特別支援委員会で対応状況を確認し、特別支援教室の個別教育計画などをもとに学年職員や保護者、支援員と対応を随時見直してきた。

居場所の掲示

登校後に職員室のマグネットで登校状況を示すとともに、登下校時刻をファイルに記入して生活を振り返れるようにした。



ICT の利用

生徒はタブレット端末、保護者はデジタル連絡帳を通して、生徒・保護者と学校間の連絡を密にしている。生徒の状況を校務支援システムの出欠欄やメモ欄に記録し、他の教員とも情報共有をはかっている。

生徒の居場所づくり

校内別室として図書室を活用し、支援員を配置して静かな環境で読書したり学習したりできるようにしている。



成果

当該生徒は校内別室への登校を開始してから、継続して登校することができた。1 日 2 時間程度であるが、ほとんど毎日登校して 1 学期末時点で欠席は 30 日未満であった。

課題

学校全体の学級数が多いため、空き教室がなく、現在図書室を校内別室と併用している。今後固定の教室を整備していく必要があると考えている。

校内別室の活用について

不登校児童・生徒の状況

対象生徒は、中学校3年生であり、家庭環境にストレスを抱え、小学校のときから登校することに価値を見いだせていない状況があった。中学1年生の1学期、頭痛や腹痛などの症状を訴え、欠席が続いて不登校となった。

具体的な取組

校内別室指導支援員の活用

校内別室指導支援員の配置を通して、今まで、女性の支援員のみで対応していた男性職員を校内別室指導支援員として配置したことで、生徒の話相手が増え、安心感をもつ生徒が増えた。

実体験を伴った活動の取り組み

当該生徒を含め希望者には理科の実験を実施するなど、多様な学習の場を生徒たちに提供した。



校内委員会による情報共有と方針の確立

週1回、学校管理職、学年担当職員、スクールカウンセラー、家庭と子供の支援員、校内別室指導支援員、不登校生徒対応担当者による、委員会にて当該生徒の現況の報告及び支援の方針の決定などをおこない、チームでの支援体制を確立している。

学級担任などによる積極的な面接の実施

学級担任は授業の合間をみて配布物の受け渡しなどを校内別室で行い、積極的に当該生徒と関わりをもった。不登校生徒対応担当者や校内別室指導支援員、家庭と子供の支援員は保護者の面談などを定期的実施し、家庭との連携を深めるように努めた。

成果

チームでの支援体制のもと、当該生徒は登校状態が不安定な時期があったものの、中学3年生の現在では、週3回のペースで校内別室等に登校することができるようになった。今後は進学など将来に希望が見いだされるような支援を行っていく。

課題

校内別室を使用する生徒が急増したため、施設面及び、現利用者の学習環境の維持や心理的なケアが課題である。

組織的な不登校対応について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、中学校1年生で、コミュニケーションが苦手であったことが不登校の要因となった。教育支援センターに通っていたが少しずつ不登校状態が改善し、学校に登校する意欲が見られるようになった。現在は教室への復帰に向けて校内別室を活用し、周囲からの刺激の少ない環境から段階的に他者との関わりを増やしていきけるようにしている。

具体的な取組

校内別室の開設

本校では、登校はできるが様々な理由により教室に入りづらくなっている生徒の学習の場として校内別室を設置している。昨年度は週3日開設していたが、令和5年度から校内別室指導員を配置したことにより週5日開設し、給食の喫食も可能になった。

校内別室の環境整備

校内別室は、各学年の教室から少し離れたところに設置し、通室している生徒の心理的な負担を軽減し、登下校の時間と重ならないよう配慮をしている。



コミュニケーションについて

校内別室に通室している生徒とコミュニケーションをとるため、学級担任は授業の空き時間等を利用して配布物を渡したり、声掛けを行ったりするなど積極的に校内別室を訪れている。今後は、給食準備の機会を利用し、生徒と教職員の関わりを増やすようにしていく。

組織的な取組について

週に1度、定例会を開き、不登校生徒についての情報共有を組織的に行っている。また、全ての不登校生徒が何らかの関係諸機関とつながることができるよう、連携の状況が把握できるよう資料を工夫して作成している。学級・学年教員のみならず、組織的に対応を進めている。

成果

校内別室の開設日を昨年度の週3日から週5日に増やしたことにより、当該生徒を含め通室する生徒が生活リズムを取り戻せるようになった。また、開設日の増加によって、登校する日が増え、結果的に欠席日数の軽減にもつながっている。

課題

校内別室に通室している生徒の数が増加してきたため、少人数での活用を望んでいた当該生徒の心理面でのケアが課題である。

不登校生徒支援事例について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、中学校3年生であり、入学してしばらくは特に問題なく生活していたが、家庭内できょうだいの不登校であったため、その影響により1学期の半ばから不登校に至った。保護者は協力的で学習環境を変えるために、家庭内でも試行錯誤を繰り返したが、変化がなかった。

具体的な取組

【1】スクールカウンセラー・学級担任と家庭によるアセスメント

- ・二者（学級担任と生徒または保護者）面談を繰り返し、生徒の状況を把握し、生徒にとって最適な支援方針を学校と家庭で連携して検討した。
- ・スクールカウンセラーと本人および保護者によるカウンセリングを定期的に実施した。

【2】校内委員会でのアセスメント

- ・週1回開催している不登校対策のための校内委員会で生徒の現状および支援策を確認した。



- ・スクールカウンセラーの助言を受け、当該生徒への支援方針を随時更新した。

【3】関係諸機関等との連携

- ・家庭内でも不登校であることから、本校学校管理職と在籍小学校の学校管理職が情報交換を密に行った。
- ・子育て世代包括支援センター等と連携を図り、必要に応じて家庭の支援を要請した。

【4】校内別室の活用

- ・常時開室することで、当該生徒が利用したいときに利用できるようにした。そのため当該生徒は徐々に別室へ登校できるようになり、現在では、毎日数時間ではあるが、登校して学習等に取組むことができている。

成果

1学期の後半は登校できなかった生徒が、学校と家庭や関係諸機関等が連携して組織的に生徒の状況把握に努め、支援方針を更新していくことで改善することができた。これによって明確なアセスメントを基に生徒への見立てを作成することができるようになった。

課題

学校の当該生徒に対する支援方針について、関係諸機関等と連携して、当該生徒保護者に丁寧に説明し、理解と協力を得た上で、支援を実施していくことが課題である。

校内別室の活用について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、中学校 1 年生であり、小学 6 年生の 7 月頃から不登校状態が継続している。不登校の要因として、当該生徒が登校することに対して価値を見出せないことがある。2 学期になり定期的に校内別室に登校し短時間であるが継続的に学習に取り組むことができている。

具体的な取組

組織力の向上

当該生徒に対して、学習面での支援の充実を図るとともに、継続してサポートルームが運営できるよう学校管理職を含めて支援を行っている。また、スクールカウンセラーや養護教諭と関わる機会を定期的に設定し、多角的・多面的な支援を行っている。

実践の成果等についての普及・啓発

職員室に校内別室出欠席状況を把握できるボードを設置し、全教職員がその日の校内別室の利用状況及び登下校の情報を共有できるようにした。当該生徒が取り組んだ内容を個別ファイルに記録し、現状を把握するとともに、各教員へ校内別室での取組を周知し、共有した。

アセスメントを重視した支援

学級担任を中心としたアセスメントに重点を置き、定期的に学級担任や校長が面談を実施するなどして、生活指導部会等において情報共有を行った。さらに支援方針の検討・協議を行い、当該生徒に対して校内別室への登校を提案した。

校内体制の強化

当該生徒が取り組みたい活動を中心に学習課題を各教員が準備し、当該生徒自身の自主性を尊重した。さらに、学級担任等と校内別室担当の支援員の連携を深めるために、登校記録・支援記録ファイルを作成し、共有した。



成果

校内体制での支援を継続した結果、当該生徒は 9 月から徐々に校内別室に登校する機会が増えてきた。また、校内別室指導支援員等を複数校内別室に配置することで、校内別室の利用日が増えるなど、不登校支援の幅を広げることができた。

課題

校内別室での支援を充実させるため、複数の支援員による支援が継続的に行われることが課題である。

校内別室を活用した不登校対応について

不登校児童・生徒の状況

当該生徒は、中学校3年生であり、中学校1年3学期末から、不登校状態が継続していた。病状による不安感が要因となり、病状が改善しても様々な不安を感じ、登校することができなくなってしまった。

具体的な取組

校内体制の強化

校内別室担当教員が各学年に1名ずつおり、アセスメントに基づき作成した共有シートを活用して毎日いずれかの時間に校内別室指導員等ともに対応している。生徒の個々の状況に応じて、担当教員が柔軟に対応できる体制をついている。

実践の成果等についての普及・啓発

登校状況や当該生徒の様子を、共有シートに記録していき、校内別室指導員等の引継ぎに活用するだけでなく、学級担任だけでなく全教職員が共有している。通室生徒の状況や変化を理解し、不登校担当教員だけでなく全教職員が共通した対応ができるようにした。

個々の不登校生徒への支援

どの教職員が対応する際にも「生徒の心に寄り添うこと」を意識している。学習の話だけでなく、趣味や家庭の話など、生徒の努力や前向きに取り組んでいることを認める声かけをしている。校内別室への登校に自信を失っている生徒もいるため、頑張りを認めて、時には励ます対応を行った。

組織力の向上

チームでの対応としては、学級担任を中心にアセスメントに重点を置き、学年や校内別室担当で共有した。校内別室を生徒の「居場所」と位置付け、チーム支援のための不登校委員会を月に1度開催し、担当間で学年を超えて共通理解を図ることや、全教職員に委員会記録を配布し、全校で情報共有している。

成果

校内別室では教員と支援員が合わせて、毎日2～3名で生徒の対応をしている。校内体制等の強化を図り個々の状況に合わせた対応（給食指導含む）ができたことで、当該生徒は安心して登校できるようになっている。



課題

校内別室への登校はできるようになったが、教室復帰に向けた心理面のケアと新しい集団に入るための準備を、校内別室の中で個に応じた指導をしていく。

安心して学校生活を送るための取組について

不登校児童・生徒の状況

当該児童は、友人関係や学校生活に負担を感じ、小学校2年生から登校を渋りはじめ、3年生から不登校傾向になった。4年生の途中から教育支援センターに入室し、学習に取り組むようになった。6年生の初めから校内別室の利用を開始し、登校が安定し、教室復帰につながった。

具体的な取組

校内別室の環境整備

個人で活動できる場所をパーテーションで仕切り、机と椅子を配置した。

また、グループ活動ができるように、部屋の中央にテーブルと椅子を配置した。床は座って活動ができるように、絨毯敷きをしている。



メリハリのある時間設定

校内別室に登校したら一日の生活のスケジュールを立て、見通しをもたせるようにしている。下校前は、その日の活動を振り返るようにしている。自己の課題に取り組む「集中タイム」や複数人での「リラックスタイム」など、当該児童の主体性を尊重しながら、安心して過ごせるようにしている。

スクールカウンセラーによる支援の充実

スクールカウンセラーによる小集団のカウンセリングや個人カウンセリングを学期ごとに1回程度実施している。

校内別室に配置している校内別室指導員やその他支援員等による個別相談についても随時実施できるようにしている。

校内別室担当者と学級担任との連携

校内別室担当者は、児童の活動の様子を記録し、学級担任と情報共有し、連携を密に図っている。教室での授業や専科（音楽や図工など）の授業参加については、当該児童の意思を大切に、自己決定させることで、教室復帰をスモールステップで進めている。

成果

校内別室による支援の取組が、教室への復帰や90日以上欠席の抑制につながることができた。特に、当該児童の気持ちや考えを最優先とし、登校や学びに向かう意欲の高まりに応じて、ニーズに合った支援を進めたことが有効であった。

課題

- ・中学校進学に当たり、支援状況の引継ぎを確実にを行うこと
- ・教室復帰の好事例を、他児童の支援に生かすこと。